

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 11 日現在

機関番号：33302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K04546

研究課題名（和文）文化財建造物の建築模型の保存活用に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research on the preservation and utilization of architectural models of cultural properties

研究代表者

山崎 幹泰（Yamazaki, Mikihiro）

金沢工業大学・建築学部・教授

研究者番号：10329089

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：文化庁の模写模造事業で製作された39体の建築模型を対象とし、その製作年と製作者、製作背景を明らかにした。製作者は、伊藤平左衛門氏、和田安弘氏がその大半だが、近年は模型製作会社が行っていることを確認した。模型の仕様調査は、39基中34基について行い、写真撮影、仕様の記録などを行った。また模型製作に関する文献を収集した。さらにこれまでの展示活用の経緯として、国立歴史民俗博物館の開館により、模型のほとんどが同館に集約されたものの、その後、本学を含め全国各地に分散したこと、模型の活用方法としては博物館での展示が行われているが、これまで製作された模型の内、約半数が現在活用されていない実態を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

建築模型はこれまで、建築とも工芸とも分類されることがなく、模型そのものの美術的、文化財的価値が認められる機会がなかった。文化庁の模写模造事業の建築模型は、あくまで文化財建造物保護事業の副産物であり、模型自体を作品と見なして、その製作背景や製作者の記録を残すことや、その価値を評価することを、これまでできてこなかった。そうした背景もあり、模型の展示機会が減少する中で、模型そのものの存在価値も薄れつつある。本研究において、建築模型を製作した背景や製作者が明らかになり、今後模型の活用を考えていく上での、基礎的な情報の基盤を築くことができた。

研究成果の概要（英文）：I conducted a survey of 39 architectural models produced by the Agency for Cultural Affairs' copying project, and clarified the year of model production, the manufacturer, and the background of the model. The producers are Mr. Heizaemon Ito and Mr. Yasuhiro Wada. In recent years, it has been manufactured by a model company. I took photographs and recorded specifications for 34 of the 39 models, and also collected literature on model making. Furthermore, I clarified the history of the model exhibition so far. With the opening of the National Museum of Japanese History, most of the models were temporarily consolidated in the museum. However, after that, the models were dispersed all over the country. About half of the models produced so far are not currently in use.

研究分野：日本建築史

キーワード：建築模型 模写模造 文化財

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

文化庁では、昭和 30 年代より文化財の模写模造事業として、国宝・重要文化財建造物の模型をこれまで 40 体ほど製作してきた。これらは、国宝建造物の修理工事で判明した伝統建築技術を、実物および修理工事報告書とは別に、模型として後世に残すことを目的としたもので、模型製作の職人が作成した精緻な模型である。昭和 39 年、オリンピック東京大会に際し、オリンピック芸術展示の一つとして東京国立博物館で開催された「日本古美術展」においては、建築模型 10 点が出品され、外国人観光客に特に好評であった。その後も製作は続けられ、製作後は国立博物館および各社寺等に引渡されてきた。そのうち、国立博物館三館（東京国立博物館、国立歴史民俗博物館、奈良国立博物館）が所有する模型 12 点が、2007 年より九州国立博物館に貸し出されてきたが、展示に使用されることがほとんどないまま 10 年間の貸出期間が満了し、新規の受け入れ先を検討することとなった。その結果、教材として展示活用することを条件として、金沢工業大学に長期貸与されることになった。

研究代表者は、これらの模型の受け入れにあたり、所有者との交渉、搬入設置の計画、実施を担当し、設置後も日常的な管理を行っている。これらの模型を受け入れるにあたり、模型の製作者、製作年などの情報を所有者も充分把握しておらず、製作に関わる資料も残されていないことが判明した。製作費や部材の材種、使用した接着剤も不明で、模型が破損した場合どのような方針で修理を行うか、大いに議論となった。文化財建造物の模写模造事業についても、公開されている情報はきわめて少なく、貴重な模型の存在が広く認識されず、どのように保存活用するか議論がないまま、製作が続けられている現状に大いに疑問を感じた。

### 2. 研究の目的

本研究は、これらの建築模型を保存活用する上で、その製作背景を明らかにし、より適切な保存活用方法を見いだすための知見を得ることを目的とする。

文化財の模写模造事業は、劣化しやすい文化財の現状を記録するため、移動が困難な文化財を全国各地で代替展示するため、などを目的として行われる。これら建築模型も、作成のきっかけは昭和 39 年（1964）東京オリンピック「日本古美術展」であった。

これらの模型は伝統的建造物に携わる大工が手掛けたもので、現存する文化財建造物をもとに、部材の形式はもちろん、継手や仕口など表に現れない部分まで忠実に再現したとされる。一方で、模型ならではの苦労もあったとされる。すなわち、これらの模型は建築のミニチュアであるか、建築とは異なる工芸品であるか、そうした線引き自体も困難で、保存活用、維持修理について独自の方法を創造する必要がある。

### 3. 研究の方法

さて、これらの建築模型を対象とする本研究は、以下の三つの方法と目標から構成される。

#### 1. 建築模型の製作年と製作者、および製作背景を明らかにするための調査を実施する。

上述の通り、12 点の模型は東京オリンピック「日本古美術展」での展示を目的とする模型と、その後の文化財の模写模造事業で作成された模型からなると考えられる。所有者である各博物館の台帳には、製作年や展示の履歴が記されている場合もあるが、情報が十分ではない。

#### 2. 模型の仕様調査を行い、記録化し、その特徴を明らかにする。

模型は実際の建物に忠実に 10 分の 1 サイズで作成したとされるが、模型によっては屋根葺き材や失われた部材を復元したり、現状とは異なる彩色を施したりしていることが確認できる。建築調査と同様の模型の仕様調査を行い、記録化することで、1. の製作背景の調査を補強するとともに、今後、模型が劣化、破損した場合に備え、修理方法を検討する際の基礎資料を用意することができる。

#### 3. 同種の模型の展示、保管、活用の現状を調査し、より適切な方法を検討する。

文化財の模写模造事業における建築模型の製作は、現在も行われており、これまで 40 点ほどが製作された。そのうち、国立の博物館に収蔵されたのはこの 12 点を含む 10 数点で、他は模型の建物の所有者や、関連施設に引き渡されたとされる。模型が散逸した理由は、十分な保管スペースが確保できないこと、博物館での近年の展示では模型を利用する機会が少ないこと、などが上げられる。まずは、こうした模型の追跡調査を行い、現在どのような施設で、どのような環境で保管、または公開活用されているか、日常管理や修理はどのように行われているか、現状を確認することで、今後の模型のあり方を検討する。

### 4. 研究成果

#### (1) 主な研究成果

主な研究成果の概要は、以下の通りである。

模型の製作者に関し、昭和 30 年代から 50 年頃までは伊藤平左衛門氏、昭和 40 年代後半から平成半ばまでは和田安弘氏がその大半を占めていること、模型の製作者は堂宮大工の経験者が多かったが、その後は模型製作会社が製作していることが確認できた。模型の仕様については、39 基中 34 基の模型について調査を行い、写真撮影、仕様の記録などを行った。また模型製作に関する文献を収集した。さらに、これまでの展示活用の経緯を明らかにした。国立歴史民俗博物館の開館により、模型のほとんどが同館に集約されたものの、その後、全国各地に分散したこと、これまで製作された模型の約半数が、現在活用されていない実態が明らかになった。

## (2)古建築模型の製作

近代以降、古建築模型の製作は、万博など博覧会出品のため、建築見本や技術の実習など教育のため、などを目的として行われた。このほかに、古建築の修理・造替の際に模型が作られる例があった。この延長線上に、国宝・重要文化財建造物の模写模造が制度化された。1)

そのきっかけは、昭和25年(1950)鹿苑寺金閣の焼失とその再建である。再建に際し、既に製作されていた模型が役立ったことから、文化財保護委員会は年々計画的に重要な指定建造物の模型を、自ら製作することとし、また指定建造物の解体修理を行う際、模型製作を勧めることも行った。2)

文化財の普及活用事業(模写模造)としての模型製作は、昭和35年度の明王院五重塔模型が第一号になった。広島県福山市の明王院では、国宝五重塔の修理工事が昭和34年から実施され、昭和37年(1962)3月に完了した。修理工事と並行して、現場に設けた工作小屋にて模型が製作された。模型は昭和36年(1961)4月に完成し、東京国立博物館へ搬送された。

当初の目的は、解体修理の記録としての模型製作であったが、さらに積極的に著名な社寺建築の模型を製作し、一堂に会して日本建築の流れを展示することが計画された。それが、昭和39年(1964)に開催された、オリンピック東京大会・日本古美術展である。

オリンピック東京大会・日本古美術展は、昭和39年10月2日から11月10日まで、東京国立博物館本館、表慶館にて開催された。陳列品総数877点、うち建築模型10点が本館一階特別第五室に展示された。この展示のために、興福寺北円堂模型、唐招提寺金堂模型、石山寺多宝塔模型、金剛輪寺本堂模型、松本城天守模型、吉村家住宅模型の6基がまとめて、昭和38・39年度に製作された。

その後、39年度に沼名前神社能舞台模型、唐招提寺宝蔵模型、40年度に光浄院客殿模型が製作され、その後も毎年一基ずつ(後に複数年度もあり)製作が続けられた。平成末年までに、39基の古建築模型が製作されている。模型対象の選択は、様式や時代を網羅するように判断されたと考えられる。オリンピック東京大会・日本古美術展では、寺院建築7基はいずれも和様の建築が対象で、禅宗様、大仏様ともなく、住宅も民家として吉村家が作成されたものの、書院造がなかったことが、当時から認識されていた。3)そこで昭和40年度に光浄院客殿、翌41年度から、東大寺鐘楼、正福寺地藏堂、浄土寺浄土堂と、大仏様、禅宗様の代表的な建築が続けて製作される。よって、必ずしも文化財建造物の修理事業と同時に、模型が作成されたわけではなかった。しかし、修理や調査で判明した技法や彩色を模型に反映させることが行われた。また、縮尺を原則10分の1とすること、断面を観察できる分割模型とすることなども、模型の共通の仕様となった。

## (3)模型の製作者について

本研究が対象とする、文化財の模写模造事業における建築模型39基をリストにまとめた(表1)。模型の製作者については、昭和50年頃までは伊藤平左衛門氏、昭和40年代後半から平成半ばまでは、和田安弘氏がその大半を占めている。

伊藤平左衛門氏(11代)は明治28年(1895)生まれ。平左衛門(第11代)を襲名した。戦後になり、社寺建築の需要が途絶えたことから、模型製作が主要な仕事になったと伝えられる。昭和23年には法隆寺五重塔復原模型を手がけ、オリンピック東京大会日本古美術展に際しては、模型四基を担当した。伊藤は製作の総指揮にあたり、大工棟梁・中島幸次郎が実際の製作を行った。金具関係は、東京藝術大学工芸科金工研究室に、屋根は屋根専門職に、彩色は東京藝大や塗装の専門職に依頼するなど、実際の建築同様に多くの職人で分担して、作業を進めたようである。なお、伊藤平左衛門建築事務所には模型製作時の道具や図面が残されている。4)

和田安弘氏は昭和7年(1932)生まれ。弟の有功氏は同11年の生まれ。昭和20年より大工の修行を積み、文化財建造物の保存修理に携わっていたが、昭和41年(1966)に平城宮内裏回廊の模型を手がけたのをきっかけに建造物模型製作に従事するようになった。平成6年(1994)に選定保存技術保持者(建造物模型製作)に認定される。平成15年(2003)旭日双光章を受章した。文化庁の国宝・重要文化財模造としては唐招提寺宝蔵(1964)が初とされるが、平城宮内裏回廊模型より遡り、やや疑問が残る。今西家住宅(1971)以降、苗村神社西本殿(2005~2006)まで、11基の模型を手がけた。

和田氏は、土台は専門の業者に依頼し、建設会社が模型製作のための実測調査などを協力したが、模型は兄弟のみで製作にあたった。和田氏が製作した模型には、塗装されたものが少ないが、塗装も彼らが自身で行っていたようである。5)

文化庁の事業以外でも、古建築の10分の1模型を数多く手がけており、兵庫県立博物館に浄土寺浄土堂、朝光寺本堂、一乗寺三重塔の模型三基が展示されている。浄土寺浄土堂と朝光寺本堂は、同館開館時に和田氏に依頼して製作した。浄土寺浄土堂は既に伊藤平左衛門氏製作の模型が既にあつたため、同じ二分分割模型では面白くないからと、屋根を一部外した構造模型とした。朝光寺本堂は二分分割模型で、現在右半分のみ展示している。厨子のみ彩色が施されている。一乗寺三重塔のみ12分の1の模型で、もともと和田氏が模型製作の仕事を受けるにあたり、試作の

ために私費で作ったもの。自宅にあったが兵庫県に寄贈し、同館に移管された。6)

ほかには、初期の明王院五重塔、沼名前神社能舞台を奈良・法隆寺の出入りの大工であった川口永蔵氏、西岡常一氏が手がけ、東福寺三門では模型内の棟札から祖田庸三氏が大工棟梁を務め、大工9名、塗師3名、建具1名、金具1名の職人が関わったことが記されている。模型の製作者は堂宮大工の経験者が務めることが多かったが、伊藤氏、和田氏亡き後は、京都科学標本、さんけいなど、建築以外の模型も製作する模型製作会社が、その製作にあっている。

表1. 文化財の模写模造事業における建築模型

番号	年度	名称	種別	所在地	縮尺	保管場所	製作者
1	1960	明王院五重塔	国宝	広島	1/10	金沢工業大学	川口永蔵、西岡常一
2	1963	興福寺北円堂	国宝	奈良	1/10	金沢工業大学	尾田組
3	1963	唐招提寺金堂	国宝	奈良	1/10	金沢工業大学	伊藤平左エ門建築事務所
4	1963	石山寺多宝塔	国宝	滋賀	1/10	金沢工業大学	伊藤平左エ門建築事務所
5	1963	金剛輪寺本堂	国宝	滋賀	1/10	金沢工業大学	伊藤平左エ門建築事務所
6	1963	松本城天守	国宝	長野	1/20	金沢工業大学	伊藤平左エ門建築事務所
7	1964	吉村家住宅	重文	大阪	1/10	金沢工業大学	天平建設
8	1964	沼名前神社能舞台	重文	広島	1/10	鞆の浦歴史民俗資料館	川口永蔵、西岡常一
9	1964	唐招提寺宝蔵	国宝	奈良	1/10	九州国立博物館	和田安弘、安田工務店
10	1965	光浄院客殿	国宝	滋賀	1/10	金沢工業大学	伊藤平左エ門建築事務所
11	1966	東大寺鐘楼	国宝	奈良	1/10	文化庁	尾田組
12	1967	正福寺地藏堂	国宝	東京	1/10	金沢工業大学	伊藤平左エ門建築事務所
13	1968	浄土寺浄土堂	国宝	兵庫	1/10	金沢工業大学	伊藤平左エ門建築事務所
14	1969	大仙院本堂	国宝	京都	1/10	国立歴史民俗博物館	伊藤平左エ門建築事務所
15	1970	慈照寺東求堂	国宝	京都	1/10	国立歴史民俗博物館	伊藤平左エ門建築事務所
16	1971	今西家住宅	重文	奈良	1/10	国立歴史民俗博物館	和田安弘、尾田組
17	1971	如庵	国宝	京都	1/5	国立歴史民俗博物館	京都科学標本
18	1972	金地院東照宮	重文	京都	1/10	国立科学博物館	和田安弘
19	1973	仁科神明宮	国宝	長野	1/10	国立歴史民俗博物館	伊藤平左エ門建築事務所
20	1974～75	一乗寺三重塔	国宝	兵庫	1/10	国立歴史民俗博物館	京都科学標本
21	1976	旧北村家住宅	重文	神奈川	1/10	国立歴史民俗博物館	京都科学標本
22	1978～79	東福寺三門	国宝	京都	1/10	国立歴史民俗博物館	祖田庸三、大栄土建工業
23	1980～81	旧花田家番屋	国宝	北海道	1/10	国立歴史民俗博物館	和田安弘、尾田組
24	1982～83	根来寺大塔	国宝	和歌山	1/10	国立歴史民俗博物館	金剛組
25	1984	本願寺唐門	国宝	京都	1/10	京都国立博物館	京都科学標本
26	1985	慈照寺銀閣	国宝	京都	1/10	京都国立博物館	和田安弘、尾田組
27	1986～87	長寿寺本堂	国宝	滋賀	1/10	国立歴史民俗博物館	和田安弘、大栄土建工業
28	1987	春日大社本殿(第三殿)	国宝	奈良	1/10	国立歴史民俗博物館	和田安弘、株式会社掲摩
29	1988～89	東大寺南大門	国宝	奈良	1/10	国立歴史民俗博物館	和田安弘、尾田組
30	1992～94	唐招提寺講堂	国宝	奈良	1/10	平城宮跡資料館	和田安弘、金剛組
31	1995～96	飯野八幡宮本殿	重文	福島	1/10	国立歴史民俗博物館	京都科学
32	1997～98	東大寺転害門	国宝	奈良	1/10	金沢工業大学	和田安弘、尾田組
33	2000～01	崇福寺大雄宝殿	国宝	長崎	1/10	九州国立博物館	和田安弘
34	2002～04	正倉院正倉	国宝	奈良	1/10	奈良国立博物館	和田安弘
35	2005～06	苗村神社西本殿	国宝	滋賀	1/10	安土城考古博物館	和田安弘
36	2008	鶴林寺太子堂	国宝	兵庫	1/10	鶴林寺	京都科学標本
37	2010	清水寺馬駐	重文	京都	1/10	清水寺	京都科学標本
38	2013	永保寺開山堂	国宝	岐阜	1/10	永保寺	さんけい
39	2014～16	観智院客殿	国宝	京都	1/10	文化庁	さんけい

#### (4) 模型の展示活用の経緯について

模写模造事業の建築模型は当初、昭和39年10月から開催されたオリンピック東京大会日本古美術展へ出展することが、製作目的の一つであった。その後、昭和40年8月には、銀座松坂屋にて「歴史にみる日本建築の流れ」展(1965/8/3～8/8)が開催され、興福寺北円堂模型、唐招提寺金堂模型、石山寺多宝塔模型、金剛輪寺本堂模型、松本城天守模型、吉村家住宅模型、沼名前神社能舞台模型、唐招提寺宝蔵模型が出展された。7)

その後は、所有者である東京国立博物館の館内で展示が行われたと考えられるが、その期間や展示状況等は詳しくは分からない。

昭和58年(1983)3月国立歴史民俗博物館の開館に伴い、模型9基が移管された。同館では、濱島正士氏が中心となって、開館当初より企画展示室および地階ホールで、常設展示を行った。次いで、東博に保管されていた模型15基と装飾彩色模写17件も歴博へ移管され、合わせて「日本の建築」として展示が続けられた。平成2年(1990)頃、東大寺南大門模型と長寿寺本堂模型を加えて、管理する模型は26基となり、装飾彩色のほか法隆寺の建築古材、建築古図も含めて展示を行った。平成12年には、東大寺南大門模型など奈良県関係の模型3基を奈良国立博物館

へ貸し出し、新たに飯野八幡宮本殿模型を加えて24基となった。8)

その後、東福寺三門模型は2008年頃エントランスホールへ移され、その後根来寺大塔模型もホールへ展示、これら2基が常時公開されているが、ほかの模型は収蔵庫で保管されたまま、ここ10年ほど展示の機会がほとんどない。

平成12年(2000)に東大寺南大門模型、興福寺北円堂模型、唐招提寺宝蔵模型の3基を借り受けた奈良国立博物館では、前年に搬入された東大寺転害門模型(1997~98年製作)とともに、西新館の1階ロビーに並べて常設展示とした。その後、平成16年(2004)に製作された正倉院正倉模型が、西新館2階休憩コーナーで展示されることになった。しかし、ロビーを展示準備や販促に利用する機会が多くなり、展示の継続が困難になった。9)

平成17年(2005)10月に開館した九州国立博物館へ古建築模型13基が貸与されたのは、平成19年(2007)10月のことである。奈良国立博物館より、東大寺転害門模型、東大寺南大門模型、興福寺北円堂模型、唐招提寺宝蔵模型の4基、国立歴史民俗博物館からは、明王院五重塔模型、唐招提寺金堂模型、石山寺多宝塔模型、金剛輪寺本堂模型、松本城天守模型、吉村家住宅模型、光浄院客殿模型、正福寺地藏堂模型、浄土寺浄土堂模型の9基である。このほかに、平成13年(2001)に製作された崇福寺大雄宝殿模型も、九州国立博物館にて所蔵、展示されている。

これらの所有者は、東大寺転害門模型は奈良国立博物館、東大寺南大門模型は国立歴史民俗博物館、唐招提寺宝蔵模型は文化庁、ほかは東京国立博物館となっている。すなわち昭和43年(1968)製作の浄土寺浄土堂模型までの初期の模型は所有者・東京国立博物館、管理者・国立歴史民俗博物館、昭和44年(1969)製作の大仙院本堂模型以降は所有・管理とも国立歴史民俗博物館になっており、前者のみが九州国立博物館へ貸与されたことになる。

九州国立博物館では、平成23年(2011)にトピック展示「日本の建築をめぐる」(2011/1/21~4/3)にて、模型5基が展示された。10)

九州国立博物館へ貸与は10年間の予定だったため、平成18年(2006)になり、模型返還後の活用方法について議論が生じた。文化庁の調整の元、貸与期間が終了した12基(九州国立博物館が管理していた14基のうち、崇福寺大雄宝殿模型と唐招提寺宝蔵模型を除く)が、教育利用を目的に、同年より金沢工業大学へ貸与されることになった。

金沢工業大学では前述の通り、12基の模型の内7基をキャンパス内に展示している。ただし、残り5基の展示の見通しは立っていない。

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会をきっかけに文化庁が開催した日本博において、古建築模型の展示を行うことになり、「日本のたてももの 自然素材を活かす伝統の技と知恵」(2020年12月24日(木)~2021年2月21日(日) 東京国立博物館 表慶館)が開催された。この展覧会に際し、筆者は展示模型の撮影、輸送、図録論考の執筆などの協力を行った。

本研究の調査時(2018年度~2020年度)において、常時公開されている模型は、18基であった。これまで製作された模型のほぼ半数が、現在展示活用されていることになる。

建築模型の今後の展望としては、かつて国立歴史民俗博物館にて行われたように、専門施設に集約して、常設展示が行われる環境が整うことが、やはり理想的である。しかし、それまでの改善の策として、輸送のリスク(輸送コスト大、破損事故の危険、開口部や搬入路の制限など)は大きいものの、展示会や見学施設、公共機関、教育機関などでの公開を通して、建築模型が人目に触れ続けるようにすることが、何よりも必要であろう。そこから、新しい活用案が生まれ、常設展示施設の需要が高まることを期待したい。

#### <参考文献>

- 1) 工藤圭章「古建築模型の製作」『MUSEUM』No.241、1971年、pp.25-31
- 2) 松下隆章「文化財の模写・模造」『月刊文化財』No.44、1967年5月、pp.4-10
- 3) 「座談会 オリンピック芸術展示 日本古美術展をめぐる」『月刊文化財』No.13、1964年10月、pp.9-28
- 4) 伊藤平左衛門「宮大工十話」『十人百話 8』毎日新聞社、1965年、pp.95-112。井上説子「『にほんのたてももの展』展示模型について」『日本伝統建築技術保存会会報』2021年2月、pp.4-6
- 5) 関美穂子「文化財修理を支える人びと② 建造物模型製作 和田安弘(兄)和田有功(弟)」『住と建築』No.464、1999年、pp.2-11。関美穂子『古建築の技 ねほり、はほり』理工学社、2000年。文化庁文化財保護部「選定保存技術の選定・認定(建造物模型製作)」『月刊文化財』No.368、1994年5月、pp.29-30
- 6) 兵庫県立歴史博物館編・発行『ひょうごの古建築と日本の城』1984年
- 7) 『歴史にみる日本建築の流れ』展示図録、1965年、読売新聞社
- 8) 以上の経緯については、濱島氏への聞き取り調査による。
- 9) 以上の経緯については、同館・吉澤悟氏への聞き取りによる。
- 10) 九州国立博物館公式webサイト・文化交流展「これまでの特集展示など」  
[https://www.kyuhaku.jp/exhibition/exhibition\\_pre76.html](https://www.kyuhaku.jp/exhibition/exhibition_pre76.html)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山崎幹泰
2. 発表標題 オリンピック東京大会「日本古美術展」の建築模型について
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 独立行政法人日本芸術文化振興会（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青幻舎	5. 総ページ数 153
3. 書名 日本のたてももの—自然素材を活かす伝統の技と知恵	

1. 著者名 山崎幹泰	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山崎幹泰（私家版）	5. 総ページ数 107
3. 書名 文化財建造物の建築模型の保存活用に関する基礎的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------